

会 議 録

1 会議の名称

平成 30 年度 第 5 回 川根本町立学校設置適正化及び教育のあり方検討協議会 研究会

2 会議日時 平成 31 年 1 月 16 日（水）午後 7 時 00 分から午後 9 時 00 分まで

3 開催場所 川根本町山村開発センター 2 階 大会議室

4 出席した者の氏名

研究会委員 梅澤収委員長、山下斉副委員長、鳥居進委員、鈴木憲委員、
石川泰宏委員、西澤浩美委員、松下文代委員、中村妙子委員、
野秋宜成委員、

※ 芦澤恵美子委員は欠席。

事務局 大橋慶士教育長、森下育昭教育総務課長、
宮島明利課長補佐兼教育総務室長兼管理主事、和田美代史指導主事
ほか 教育総務課職員 2 名

傍聴者 3 名

5 議題

協議（報告事項）

(1) あいさつ

- ・ 大橋慶士教育長

(2) 協議事項

- ① 川根本町の物的・人的教育資源等を最大限に活かすための教育のあり方について
- ② 質疑応答

6 会議資料の名称

「川根本町学校設置適正化及び教育のあり方検討協議会 会議資料」（資料 1）

『「新時代の学びを支える先端技術のフル活用に向けて～柴山・学びの革新プラン～」について』
（資料 2）

「Society 5.0 とは」（資料 3）

「ベネッセ 教育サイトより（小中一貫教育を実施する「義務教育学校」がスタート 利点と
課題は？）」（資料 4）

「小中一貫教育制度の導入に係る学校教育法等の一部を改正する法律について（通知）」
（資料 5）

「地教法の改正及びコミュニティー・スクールの推進について」（資料 6）

7 発言の内容

(1) あいさつ

- ・ 大橋慶士教育長

第 5 回教育のあり方検討協議会研究会にお忙しい中出席いただきありがとうございます。
昨年 11 月 29 日に、第 2 回協議会を開催し委員の皆さんのご意見を伺った。その内容を本
日報告する。それらを踏まえて検討をお願いしたい。今日は今年の協議会の際に「Society
（ソサイエティ 5.0）」要するにこれからの社会は仮想空間と現実社会を併せた社会になっ

ていこうという映像を見ていただいた。そのような社会で子どもたちは生きていかなければならない。そのような社会の中で必要な能力は何かを踏まえ、文部科学省でこれからの教育はどうなるのかということを出している。今日は11月29日に協議会で見ていただいた映像と、コミュニティー・スクールについて知っていただきたいため、これに係る映像をご覧いただきたいと考えている。これらを見ながら、これからのこの町の教育のあり方を考えていただきたいと思う。

- ・ 梅澤収委員長

第5回ということで、そろそろ方向性についてある意味見えてきたのではないかと思う。ここで方向性を出しても決めるのは地域住民の方とか学校とか子どもたちとなり、どんな知恵を絞ってもらうかが重要なことだと思っている。我々はそれらと対話みたいな形で、ここで議論した内容をお伝えして、自分たちがどうしたいのかを出してもらい、両方が知恵を共有していかないと良いものは出来ないと。最終的に責任をもってどうやって行うかを決めていくのは地域の方や子どもたち、学校などの当事者ではないかと思う。当事者がどうやりたいかが一番大切で、それを色々と実現できるように支援していくのが議会や行政の役割であると思う。今後も協議しながら第2ラウンドは地域に出て行って、地域の方々の意見を聞いて、ここならでは一番良い方向性を探っていく必要があると考えている。

- ・ 「Society (ソサイエティ 5.0)」に、向けた人材育成に係る前林芳正文部科学大臣懇談会映像視聴

- ・ 「Society (ソサイエティ) 5.0」という社会（あなたのところにもこんな未来が！？）政府広報映像視聴

- ・ 「新時代の学びを支える先端技術のフル活用に向けて～柴山・学びの革新プラン～」について（柴山昌彦文部科学大臣）映像視聴

- ・ 「貝ノ瀬滋文部科学省参与に聞く～コミュニティー・スクール～」映像視聴

(2) 協議事項（協議会設置要綱第4条第8項に伴い委員長が会務を総括）

委員長：今映像を見ていただいたが、Society (ソサイエティ) 5.0の時代は、コンピューターや機械が使えない状態となった時にどうするのが重要となる。コミュニティー・スクールも基本的には教員の先生方が配慮や調整をして時間もかかるし機能しないのではないかとされている。制度を持ってくればうまくいくという時代は終わっていて、一つ一つ丁寧にやっていくことが重要である。学校だけのことを校長が責任を持ってやるという話ではなく、学校以外の機能を地域に残して子育て支援、社会教育、保健医療なども含めた、たまり場的な場所をどう作っていくかという時代に来ている。専門分野でやっていたものがコンパクトなやり方でやっていかない限りそれぞれの人のところにしわ寄せがいくようになってしまう。教員の働き方改革の問題もそうである

が、カリキュラムを変えない限り難しいと思う。方向性としてはコミュニティー・スクールの方に来ていると思うので、そういう機能を入れるのであれば、うまく機能し実現するような工夫が必要である。

事務局より資料1に沿って11月29日開催の第2回協議会時の委員の意見を説明

- ・河津町や西伊豆町が学校統廃合を打ち出しているが、緊急性のない本町とは状況が違うため、浮足立って「本町も」と進めることは危険である。
- ・流れの早い社会の最先端のところでの子どもの対応という視点にプラスして、子どもたちが地域の中で育ち、文化や伝統を体験しなおし継承していくことができるようにすることが重要である。(教育施策)
- ・過疎という課題を意識しながら、遠隔授業やICT教育を活用するなどの工夫次第で、人数も少ない田舎の方が魅力的な教育を発信していくことができる。
- ・学級の人数が少ない方がプロジェクト学習など新しい教育に全体で取り組んでいくことができる環境にある。
- ・始めから統合ありきの議論をするのではなく、どのようにすれば子どもたちに必要な新しい学びを創っていくことができるか、少人数には新しい学びを創るチャンスがある。
- ・統廃合によりコミュニティー機能を失うより、新しい形で複合的なコミュニティーの再生的な機能を持たせていく発想が必要である。
- ・持続可能な地域を創るためには教育が大切である。子どもは適応能力があり、自ら考えて行動することが大事である。教育の質を大切にしてほしい。
- ・別々の小学校に入学した子どもたちが、RG授業で再会し、一緒に学ぶ機会を創れていることをとてもおもしろいと思うし、子どもたちにとってプラスになればいい。
- ・川根高校も魅力的になっているので、町からでなくても大学に入れるシステムがベストである。
- ・幼・保・小・中・高一貫教育のような川根本町ならではの教育を進めたい。
- ・RG授業での緊張感の中での学びが、実は子どもたちの成長(学力、コミュニケーション力)に繋がっている。人との繋がり、人との関わりの中で学ぶという視点で、RG授業の成果が上がっている。
- ・地域社会とのつながりの中で教科横断的な学習を進め、地域課題と向き合っていくことができるような主体的な学びを創るステップに進化させたい。
- ・新しい学びは、川根本町のような地域から始まっていくのではないか。
- ・義務教育学校とした場合、9年間の教育をどう構成するかを考えていく必要がある。西伊豆や引佐北部小中学校のパターンは一例である。
- ・これからの教育は、一人一人の学びをいかに積み上げるか、そしてその学習ログ(記録)をきちんと持って高校へ送り出していくような流れとなる。
- ・川根本町の子どもたちをどのように教育していくか、どのような学びを保証していくかという視点で考えていく必要がある。
- ・子どもたちの学びの成果を多面的にきちんと評価し、家庭、保護者へもフィードバックさせていく必要がある。

- ・R G授業について、教員が評価検証を行いながら、現在の「日常の各校での学びの成果を発揮する場」とした取組を行っている。学びの積み上げにより、R G授業で子どもたちが活躍をし、さらに自信を深める取組を行っていることを、保護者へ伝えていかなければいけない。保護者の声も吸い上げたい。
- ・川根本町の場合、町域が広いため、通学時間の問題がついてくる。乗降時間も考慮しなければならない。

事務局より資料4に沿って小中一貫教育について説明

- ・義務教育学校、小中一貫校のメリットについてわからないとの意見もあった。現在（株）ベネッセコーポレーションが川根本町のICT教育推進のために関わっていただいているため、このサイトがわかりやすいと考え添付した。懸念されることとして、「学校統廃合のために安易に利用されることがあり、保護者や地域住民を説得するために、小中一貫教育の導入を掲げるケースが少なくない。」という記載がある。また、裏面に、コミュニティー・スクールとセットで、地域住民と一緒に学校を創っていき、学校を中核として衰退しつつある地域を再構築しようというのが、小中一貫教育のもう一つの狙いとなる。どういう学校を創っていくのか、どういう子どもたちを育てていくのかという部分と繋がってくる。その他の法令等に係る資料については、お読み取りいただきたい。今回の法律の改正は、義務教育学校や小中一貫校を創りなさいといったものではない。より地域地域にあった学校創りに努めていきなさいといったものとなる。コミュニティー・スクールの設置についても努力義務となっている。県では、いつ創るのかといった問い合わせがある。創らないといった選択肢はない。努力義務なので、いつどのような形で設置するかといった中で、新しい川根本町の教育のあり方を考えていかなければならない。

委員長：コミュニティー・スクールの設置は努力義務ということなので、川根本町ではどのようにしていくのかを考えていかなければならない。協議会の議事録をまとめたものを見ていただきながら今後の方向について考えていきたい。

委員：未来の社会で子どもたちが生きていくこととなるが、その時に必要な力は何なのか、川根本町の子どもたちがこの地域の特色を生かしながらどのような力を付けていかなければならないのかを考えると、機械が使えなくなった時にどうするのか、すべてがAIで示してくれる中で、その機械が壊れた時に子どもたちが機械頼みの便利な世の中で何ができるのか、どのように生きていかなければならないのかを考えて育てていかなければならないため、大変難しいのではないかと感じた。AIが進んだとしても、人と人とのコミュニケーション力は大事になってくる。しかし、AIが進むと人と関わらなくてもよくなる時代になってしまう。トラクターが無人で動いている時にその農家の方々は何をしているのか。プログラムをする。土の状態はすべてAIが管理してくれる。何も考えない農家が生まれてしまうのではないかと思う。しかしそのようなことはないと思う。研究会や協議会での話し合いの中で、川根本町の特色を活かして育てていくかをべ

ースにして、今後の学校のあり方、子どもの数が減っていく中での教育のあり方を考えなければならぬと感じている。

教育長：AIは基本的に確立と論理と数学であると思う。数式に置きかえられないものはAIにはならないと思う。機械学習は、確立と論理と数学を勉強している。

委員：先日の校長会の中で、柴山文部科学大臣の学びの革新プランの中で謳われている、Society（ソサイエティ）5.0の時代こそ学校は単に知識を伝達する場ではなく、人と人との関わり合いの中で人間としての強みを伸ばしながら人生や社会を見据えて学びあう場とすることが求められていることとなる。いずれAIに取って代われる時代が来るからこそ人と人との関わり合いが大切であると言っている。プログラミング教育も、本来の目的は、論理的な思考を養うということで、プログラミングをしてロボットを動かすのが目的ではない。これまでも国語とか数学と理科とかでも論理的な思考を学ばせていた。もう少し特化してやろうということなので、必ずプログラミング教育をする時に、スキルとか手順だけを教えるのではなく、プログラミングをしてロボットが動かなくなった時に、どういう指示の出し方、論理的な思考が間違っていたから動かなくなってしまったか、動いた時には、こういう手順で考えたからうまくいったそのところを子どもたちに価値づけ、意味づけしないとそれが本来の論理的思考を養うプログラミング教育であると話をした。そういうことをきちっと抑えておかないといけないと感じている。また、あり方検討協議会としては、川根本町ならではの教育をどうするのかという視点で考えていく必要があると思う。

委員長：川根本町ならではのとは、学校とか子どもたちとか色々な人たちがどう考えるのか、逆にいうと問題解決ではないが、じっくり考えていただかないといけないのではないかなと思う。先ほど、コンピューターが下町ロケットでやっていたように、トラクターが無人でやったらどうするのかを考えると農家はいらなくなってしまうため企業が入って、企業が遠隔操作でやるようになる。そういう時に、農家はどうするのか、次にどんな種類の作物を作ったらいいのかとか、新しいビジネスモデルにつなげて新しいことをやるとかというクリエイティブなことに向かうことが望ましいと思う。2つあって、今まで労働力が変わった分余ったのでどちらに行くかを考えた時、AIを補助する業務やAIを使って新しいクリエイティブな仕事を創ったり、ビジネスモデルを創ったりするほうに向かうと言われている。学校教育がこれから目指さなければならないのは、新しいクリエイティブな方に向けて、小さな頃から自分のやりたいことをやって、人との関わりの中で人間的に成長させながら自分の能力が発揮できるようなイメージが目指されている。一方、今までのように学校の中でできちんと決まりを守るようなことだとか、そういうものをどれだけ教えることができるのか、基本的な生活習慣の教えはやらなくてもいいのか、それも違うように思う。そういう意味で、学校ごとにあるいは地域ごとに学校の人たちが話し合って自分たちはこれが大切だとか、地域ならではのとか、川根本町ならではのとかを残し新しいことも取り入れていくことが必要だと思う。

教育長：先日データサイエンスの研修会に参加した時、大阪ガスに25年間勤務し、その後千葉大学のデータサイエンス学部の教員になった方が、従来機器の故障があった時に、部品を持って現場に行ってから機器を確認すると非効率であったが、これまでの故障

の状況をデータベース化し分析をすると、故障の内容によって目安が立ち、必要な部品を持って現場に行くとの的中する。最初は嫌がっていたが効率よく修理ができるようになったと話していた。その方が、技術者の心配はいらないと言っていた。組織であるため、トップと中間層と労働者がいる。今心配しているのはトップであると言っていた。本当にトップがどういう方向に引っ張って行くのかが大事であって、その人材が足りないと言っていた。AIは、確率と論理と数学であると先ほど発言したが、確率は客観的確率と主観的確率もある。双方を組み込んでいくことが機械学習というやり方である。そのような技術は確立している。今後そのようなものを使ってどう仕事を進めていくのか大切である。そのようなクリエイティブな仕事を創っていくことになる。

委員長：携帯電話と同じで、人間が使いこなすスタンスが重要である。使いこなすために人間はどんな力を身に着ける必要があるのかが論点で、もし壊れてしまったらどうするかというと、人間がたどってきた技術とか歴史を学校で勉強している。たどることでダメだったらこうやる、昔に戻ってできることが継承されていくことが必要になる。人類の歴史をたどりながら今の最先端があり、能力を維持していくいわゆる危機管理という議論が重要となってくる。

教育長：壊れた時にどうするのかを考えて対応することが重要となる。

委員長：人間の知恵はそこにあって、これがうまくいかなければ次を考え対応するとか、危機管理を考える必要がある。そうするためには経験がなければならない。経験がないとうまくいかない。それが重要である。

事務局：Society (ソサイエティ5.0) の時代を見てもらったが、先輩とおそろいの靴を履いて、バスに乗って楽しい時間を創るという思いは変わらないところである。そのために便利な道具として上手に使っている。それは人間の一番大切なところであって、人と人とのつながりをもって、周りの便利な物を道具として有効的に使っていく資質がこれから必要になってくる。その中で、今学校教育ビジョンの中で、先生方は、川根本町の子どもたちにとって必要な力として、「問題解決力」、「表現力」、「コミュニケーション能力」が大切だということで、学校間の連携を図りながら、それぞれの学校で特色ある教育をやってきており、その成果が出てきている。だけれども、協議会の委員の皆さんの意見を見ると、「それが小中だけではなく小さいころから高校までずっと繋がって学んでいけるようにという視点が大事である。」とか、「成果が上がっているけどそれをどれだけ保護者の方、地域の方に説明してきただろうか。もっとその辺の意見をもっと吸い上げてこなかったのか。」という反省点がある。これからはそれぞれが取り組んでいる中でそういった視点をどう盛り込んで川根本町ならではの創っていけばいいのかを保護者とか地域の方へ発信していく必要があると事務局では反省点として持っている。大切な部分は変わっていない。今積み上げてきたところの中に何をさらに積み上げていくことが大切なのかという議論が必要となる。事務局としてそのような考えを持ちながら皆さんから意見をいただいて具体的に外に示していきたいという思いでいる。

委員：会議資料を見せていただく中で、幼児教育の立場から「幼・保・小・中・高一貫教育のような川根本町ならではの教育を進めたい。」とあり、川根高校も魅力的になってき

たので、川根高校の存続にも力を入れている。けれども、学校適正化が掲げられているが、平成27年には20名に満たない出生の数で、幼稚園1園とそれ以外に保育所が3園あって、幼児を扱う場所としてどのように分散していくかが問題となる。幼稚園としてこれからどうなっていくかが不安である。やはり、幼児教育は非常に大切であると思うので、川根本町において幼児教育に目を注いでいただきたいと思う。先ほど Society (ソサイエティ) 5.0の映像で大変便利な時代になってくることを見たが、幼児教育としては人間として育ててほしい本質的なものはなにかを見据えながら子どもを育てていかなければならないと思う。特に幼児期は大切な人格形成の時だと思うので、人として何が一番大切なのかを考えると、人への思いやりとか優しさとかロボットではできないような思いやりとか人との大切なコミュニケーションを子どもたちの中に幼児期に育てていかなければならないと思う。新しい時代は便利で魅力的な時代であると思うが、反面恐ろしい面もあると思う。小さい時から人間として大切なことを教えていかなければならないと思う。

委員長：幼児教育が大切であることについてはその通りであると思う。子育て世代のキーパーソンとして、一緒になって楽しくやろうみたいなキーパーソンがいなくなかなか人が寄ってこないと思う。静岡市の清沢こども園においては、一人の子育て世代の人がやろうよと皆に呼びかけたら、今そこに集まってきてかなり子どもたちがこども園に通っている。一緒にやろうよという仲間がいると、そこに行って子育てをしたいと集まってくる。島根県の島前高校でも、そこでやると楽しい。やりがいがあって面白い。空間やパターンができていかなくなかなか思うようにはいかない。関係創りが重要である。幼児教育の子育て世代の方々がここに来て子育てしたいというためにはそこまでのソフト面のシステムがないと難しいのではないかと思う。

委員：低学年に限らず、遊びや体験の中で、実際に自分でやってみた中から、たくさんの人との関わりも含めて、保育園や幼稚園からの繋がりが大事ではないかと思う。今、来年度のカリキュラムをどうするかを検討している中で、子どもたちが素直で、仕事も一生懸命やるし、進んで校庭の掃除もする姿を見て、子どもたち自身が家族や地域の人や普段お世話になっている人たちに自分が支えられ見守ってもらっている安心感が子どもたちの中にあるから、学校の中でも自分の力を発揮できるし、RG中でも発揮できるのではないかと思う。川根本町の大人の良さや地域の良さを無くしてはいけないと思う。子どもたちが小さいころからこの環境の中で育っていることが子どもたちの力の基となっているのではないかと思う。

副委員長：川根本町の子どもたちの弱点を考えてみると、一人一人が精神的にもろいところがあり失敗を怖がる場所がある。川根本町において自己肯定感の調査をしているが、自己肯定感が高まっていかない面がある。テストを採点する際に、○を付けるのか×を付けるのかを先生方に聞いた時に、先生方は軽くレ点を付けていて×は付けないと言っていた。テストで何点取ったら何かを買ってあげるとか、何で間違っただとか間違っただことをダメと言っているため、無くしていきたくて考えている。間違えたことは×ではない。プログラミング的思考だと、間違っただと原因は何かをたどっていきながらフィードバックし、そこから間違いを正しい方向に導きだしていることがとても大切であるが、子どもたちは、「間違い＝×」だから全部消して最初からや

り直す思考になっていることを考えて、そのような積み上げがあつて自己肯定感がなかなか高まっていけないのではないかと考えている。学校では、子どもたちに成功体験をさせようというのではなく、小さな失敗の克服体験を積み上げていこうと先生方に言っている。学校評価で、「子どもは学校へ行くのが楽しい。」ということをお聞きかして、パーセントが高いと楽しく学校に来ていたと思っていたが、学校は楽しいことばかりではない。むしろ苦しいことが多く、頑張つて登校するところだと思えることがたくさんあり、子どもたちが社会に出た時に、人生バラ色ではなく、世の中は楽しいことだけではないため、大人は頑張つて生活していることを子どもたちに学校の中で分かるように伝えていかなければならないと考えている。小学校では自己肯定感を高めていきたいことが課題で、課題を解決するためには、学校だけではなく保護者の方々に子どもへの関わり方をお話しして、保護者とともに同じスタンスで子どもたちに関わっていききたいと考えている。

委員長：今おっしゃっていただいたことはとても大切で、学校って今までは知識を正確に教えてもらつてそれを吐き出してあつているかあつていないかを判断していたが、基本的にその構図は、先生が答えを知つていて、その先生が想定している答えを答えるのが良くできる子どもだと言つていたが、クリエイティブは、自分で失敗したり考えたりして答えを出し、納得することで、それが正しいか正しくないかは、その人が納得しているかしていないかで、色々な人と交流する中で、答えを変えていくという積み重ねのプロセスが人間の学びとして大切で、個人が自分で主体的に考え、学んで成長していくというプロセスを保障していくことが必要であるが、今まで先生方がやってきたことを変えていくことが難しいと思つている。先生が全部教えるのではなく、子どもと一緒に考えていくということで少し楽になるのではないかと思う。

委員：この会に出ると大変勉強になる。幼・保・小・中の色々な先生方の意見を聞いて考えることはあるが、ここは、教育のあり方を研究・協議する場なのか。

委員長：設置適正化という問題もあるが、及び教育のあり方検討協議会となつているので、適正化の問題もあるがプラス本来どういう教育をやつていったらいいのかを考える場となつている。

委員：各カテゴリーで、現状や課題を洗い出していくのか。何を観点に話をすればいいのか絞れずにいる。川根高校の現状を話すこともできるし、川根本町ならではの教育は何を目指したらいいのかを話すこともできる。

委員長：期待していることは、高校の現状を踏まえてこれからこういうことを目指したらいいのではないかと、やる必要があるのではないかと話してほしい。幼から中までの連携に加えて、高校、大学までの連携についてこうしたらいいのではないかと。また、人を増やすことを含めて、川根本町での戦略について話してほしい。

委員：先ほど事務局で、問題解決能力、表現力、コミュニケーション能力、を付けたい力として取り組んでいると説明されたが、そこが中心になるのであれば、そこを中心に話をしたらいいと思う。あるいは、地域社会の繋がりや幼・保・小・中・高一貫という視点で話をしたらいいのか

委員長：川根高校では、連携型の中高一貫教育を行っているが、どういう形でやつていったらいいのか。あるいは、難しくなつているのか。こうやればもっとうまくいくと思われ

るのか。今、高校改革も進んでいるため、川根高校ではこういうことをやろうと考えているのかなどを踏まえて、中学校等での学びについて考えているのか。町として、川根高校に進学してほしいのか、川根高校以外でも川根本町のことを考えて進学し戻ってきてもらって川根本町で活躍してほしいのかなど、川根高校さんとしてどのように考えているのか。

委員：中高連携という観点でいくと、連携中学校からの入学者が減ってきていることが課題だと思っている。川根高校の魅力を高めていくことが必要であると思う。川根本町では人的にも財政面でも川根高校を支援してくれている。川根高校は、地域との繋がりが強い学校だと考えている。

委員長：川根高校としてコミュニティー・スクールを入れたらうまくいくと思っているのか、課題も多いため慎重に考えているのか。

委員：コミュニティー・スクールも色々なあり方があると思う。川根高校は、十分コミュニティー・スクール化されている。今更必要はないと思っている。現実的にはコミュニティー・スクールに近い対応をしている。

委員長：静岡県において、全体的にコミュニティー・スクールが入っていないのは、地域がかなりサポートしてくれているから、改めてコミュニティー・スクールを創る必要がないとの意見がある。コミュニティー・スクールを可視化することによりうまくいくことを考えることも必要であると思う。

委員：コミュニティー・スクールも色々問題も多いと思っている。意識のある方々が意見を出してくれることは必要であるが、基本的な知識があるかが大切で、わからない方が色々な意見を言うことが問題であると思う。資料において、「教育内容の具体」とあるが、具体的ではないと感じる。もう少しシャープで次につながるような新しい提言として地域の方々に発信できるようなものを考える必要があると思う。川根高校の1年生において、連携中学校の生徒より連携中学校以外の生徒のほうが多い状態となっている。学校には3つ要因があつて、建物と教員と生徒であるが、生徒の質が変わってきている。普通の学校であれば同じ学区の中で同じぐらいの割合で入学するので同じような状態で流れていくが、川根高校では県内でもまれなケースでここ何年かで質が変わっていると思っている。地元の素直で学力が安定している生徒と、外から来るスポーツをやりたいなど色々な生徒が入学してきて、混乱すると思っていたらそうではなく、体育館のスリッパをしっかりと揃えることが出来たり、あいさつをきっちりとするなど、外からの生徒が乱すと思っていたが、地元の生徒のおかげで外からの生徒が影響されてしっかりとしていく。それは、川根本町のおかげではないかと思う。地元の方々がしっかりと見てくれている。小さいころから積み上げてきた地域の力、小学校や中学校の先生方の指導からだと思う。

委員長：高校の普通科としての問題点は、実学的なところを行わず、一般的な勉強だけでいいのかがこれからの普通科の課題であると思う。新しい必要な能力を見つけるためにどんな学びをするのか、どんなカリキュラムを創っていくのかを考えていかなければならない。プロジェクト学習のようなものを入れ込んでやってみてそれを検証し次に繋げるようなことをやってみたらと思う。少人数のほうがプロジェクト学習は出来ると思う。

事務局：会議録を見ていただくとわかると思うが、具体的なことは出ていない。そのようなことを伝えたくて資料を作成した。協議会の際には、慌てて統廃合ではないという意見であった。慌てて統廃合ではなく川根本町として小さいからもっともっと良いものを創っていけるのではないかというような意見が大枠として出されている。意見としての具体はなかった。視点として、良さがあるので、良さを生かしてまたさらにそのような視点を入れながらやっていくことが必要である。統廃合よりそっちが先ではないかというような確認がなされた。良さばかりではなく課題もある。全体として具体がない中で研究会として話をしていくのに、川根本町ならではの0歳から18歳までの教育大綱を創っているの、背骨となる部分を創ったうえで各学校の教育をさらに進めていきながら川根本町型の教育をきちっと創っていこうというところである。コミュニティー・スクールも入れること自体がいいのではなく、地域とどう役割分担をしていくのかを考えることが大切。運営協議会の中で、地域に入ってほしい部分が学校として必ずあるため、その部分は地域の中で責任をもって支えていただく点を確認していくことが必要で、教育の中身がないと、川根本町としてのコミュニティー・スクールができていかないという意味で資料を作成させていただいた。

委員長：具体的な考えは、自然な形で自由に意見を言い合わないに出てこない。もう少しフランクなところでやらないと無理ではないかと思う。

事務局：冒頭委員長から新聞記事について出されたが、慌てて決める必要はないのではないかというような議論となっており、ぐずぐずして決めてられなかったものではない。その点をきちっと研究会の委員の皆さんにはわかってほしい。

委員長：この協議会は、3月で終わるのではなく、もう1年くらいかけて色々とやるべきことをやっていきたいと事務局と打ち合わせを行った。これから具体的なアイデアを出してほしいと思う。

委員：色々ところで川根本町の子どもたちは良く、地域に育てられていることを実感しながらいるので、思いやりやさしさがあるのは分かるが、そのような子どもたちが大人になると川根本町から離れていく現実があり不思議に思うことがある。この会に出させていただき、話の中身が川根本町の子どもたちをどう育てるのか、川根本町の幼・保・小・中・高の連携に向けた一貫した教育をどう進めるのかが会の中心となっている。先ほどの話の中で、その先に学校の設置適正化というテーマがあるということを知ったので、確認ができた。デリケートな問題で、町の財政や行政が関わってくるため話題にしにくい面もあるが、町内全体で20人弱の出生者では大変厳しいと思う。去年生まれた子どもの数だと小学校にしてみると5年後の話となる。いずれにしても早いうちに話題にしていかなければ、どこの市町においても統廃合の話題が出ている。

委員長：2回目ぐらいの研究会の際に、データが提示されたが、統廃合しても統廃合の対象となってしまうため、いそいで統廃合しても意味ないので、色々な工夫をして知恵を絞りながらいずれは統廃合することになる。統廃合しなくていいのではなく、いつかを目途にしていくための準備なり新しい方向を工夫していく、スケジュール感も含めて考えていくことになる。地域の人たちがどのようなイメージでいるのかを聴き取る必要があると思う。保護者の声も吸い上げていく必要もある。

教育長：本日話し合ったことで、子どもたちの教育について、時代も変わっていくことも理解

されていないと思う。学校をどんどん見てほしいと地区内の人に言ったこともある。新時代を見据えた多様な教育を理解されていない面もある。そうすると。複式学級は悪だとかと持っていつてしまう。そのような面も理解してもらったうえで話し合いをして、学校をどのように適正化していくのかを考えていかなければならない。

委員長：柴山文部科学大臣のプランは、過疎地を遠隔で繋いでできるというものである。だからICTは40人の何クラスの学校でやるのではなく、過疎地と大きな学校を結んで、そこにいながら学習できるものとなる。ICT基盤を活用し、川根本町もモデルになれる充実した環境が整っている。

委員：研究会や協議会の最初に出されたスケジュールだと、今年度で話し合いが終わるようなものとなっていたため新聞に取り上げられたのではないかと思う。とは言いながらも、どのように進めていくのか。

事務局：話し合いの中や文部科学大臣のプランも出されたため、来年度も踏まえて協議していきたいと考えている。そのため、11月に協議会の委員の皆さんへの中間報告の会を行わせていただいた。今の話の中でも住民の方や保護者の方の意見を吸い上げる方法も考えていかなければならない。その意見を踏まえて協議会の中で協議していきたいと考えている。

委員長：今後も継続して協議をいただきたい思っている。今日はここで閉会とする。お疲れ様でした。

午後9時00分閉会